

# 外交拠点としての難波と筑紫

Naniwa and Chikushi as Hubs of Diplomacy

仁藤敦史

NITO Atsushi

はじめに

① 孝徳期の外交基調

② 孝徳期の外交的対立

③ 孝徳期の難波遷都

おわりに

## 【論文要旨】

難波は古代都城の歴史において外交・交通・交易などの拠点となり、副都として機能していた。外交路線の対立（韓政）により蘇我氏滅亡が滅亡し、難波長柄豊碕宮（前期難波宮）が大郡などを改造して造られた。先進的な大規模朝堂院空間を有しながら、孝徳期の難波遷都から半世紀の間は同様な施設が飛鳥や近江に確認されない点がこれまで大きな疑問とされてきた。藤原宮の朝堂院までは、こうした施設は飛鳥に造られず、この間に外交使節の飛鳥への入京が途絶える。これに対して、藤原宮の大極殿・朝堂の完成とともに外国使者が飛鳥へ入京するようになったことは表裏の関係にあると考えられる。こうした問題関心から、筑紫の小郡・大郡とともに、難波の施設は、唐・新羅に対する外交的な拠点として重視されたことを論じた。

前提として、古人大兄「謀反」事件の処理や東国国司の再審査などの分析により、孝徳期の外交路線が隋帝国の出現により分裂的であり、中大兄・斉明（親百濟）と孝徳・蘇我石川麻呂（親唐・新羅）という対立関係にあることを論証した。律令制下の都城中枢が前代的要素の止揚と総合であるとするれば、日常政務・節会・即位・外交・服属などの施設が統合されて大極殿・朝堂区画が藤原京段階で一応の完成を果たしたとの見通しができる。難波宮の巨大朝堂区画は通説のように日常の政務・儀礼空間というよりは、外交儀礼の場に特化して早熟的に発達したため、エビノコ郭や飛鳥寺西の広場などと相互補完的に機能し、大津宮や浄御原宮には朝堂空間としては直接継承されなかったと考えられる。藤原宮の朝堂・大極殿は、7世紀において飛鳥寺西の広場や難波宮朝堂（難波大郡・小郡・難波館）さらには筑紫大郡・小郡・筑紫館などで分節的に果たしていた服属儀礼・外交儀礼・饗宴・即位などの役割を集約したものであると結論した。

【キーワード】 前期難波宮, 朝堂院, 難波遷都, 外交, 唐帝国